

平成 30 年 6 月 23 日現在

機関番号：32657

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02763

研究課題名(和文) 英語話者と日本語話者による重複発話と協調性の産出に関する異ジャンル間対照研究

研究課題名(英文) Cross-genre study of overlaps and creating collaboration by English and Japanese

研究代表者

竹田 らら (TAKEDA, Lala)

東京電機大学・工学部・講師

研究者番号：80740109

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：親しい大学生同士と初対面同士の自由対話と課題達成談話を対象に、ジャンル・言語・心的距離が重複発話と協調性の関係、また、重複発話が合意形成に与える影響を分析した。そして、日英語の第一言語話者同士を比較し、話し手と聞き手の立場を維持しつつ合意に至る英語話者と、同一表現の重複で協調性を生み出しつつ合意を図る日本語話者の傾向を示し、日本人学習者が英語の重複発話を学ぶ上でどの指導法が可能かを考察した。そこから、ジャンル間で異なる語用規則をより明示的に指導へ組み込む必要性と、異文化コミュニケーション能力向上のために、暗示的指導と明示的指導を並行して導入する必要性を、教材作成への一助として提言した。

研究成果の概要(英文)：This study focused on topic-based dialogues and task-based dialogues of acquainted dyads and non-acquainted dyads to analyze the influence of genre, language and psychological distance on the relationship between overlaps and collaboration and that of overlaps on consensus building. The comparison of L1 interactions between English and Japanese showed the tendency of English interlocutors who reach consensus with keeping the role in dialogues and that of Japanese who lead to consensus with creating collaboration through overlapping the same expression as that at the previous turn. Based on them, I discussed which teaching method is feasible for Japanese L2 learners to acquire English overlaps. The research suggested the two types of necessity so as to develop materials: more explicitly incorporating pragmatic rules according to genres into conversation teaching and introducing implicit and explicit instruction at the same time in order to improve intercultural communication skills.

研究分野：外国語教育・相互行為の社会言語学・語用論

キーワード：相互行為の英語教育 異ジャンル間比較 重複発話 協調性 語用規則 明示的指導と暗示的指導

## 1. 研究開始当初の背景

重複発話の研究では、これまで、話し手が交替する場所を明らかにしようと移行適切箇所や予測可能性などの規則を提示し、重複発話をその規則から逸脱した現象だと捉えた社会学的視点による会話分析の考え方 (Sacks, Schegloff & Jefferson 1974; Tanaka: 1999 他) が広く支持されてきた。

一方で、研究代表者は、テレビやラジオの対談番組にみる重複発話について、内容、表現、リズム面に着目した日英語比較を行ってきた。そして、社会的コンテクストとの関係から相互行為や言語使用を見るメタコミュニケーション (Bateson 1972) の視点を採り、重複発話と参与者同士の協調性について考察してきた (Uchida 2005, 2008 他)。その結果、英語話者は相手の発話を訂正する時に、日本語話者は相手の発話へ同意する時に、より多く発話を重複させることが分かった。

また、日本語話者による同意の重複発話は、参与者同士で会話のテンポを同化させ、繰り返しや補足を伴って進行していた。これは、日本語の対談で際立った傾向であり、英語では、同意の時はもちろん、訂正の時でさえも観察されなかった。

そもそも、私たち日本語話者は、英語話者と英語で話す時、日本語で話す時とは色々な意味で違った態度で話さなければならないことを、経験から感じ取っている。ただ、その際、前段落で述べた同意の重複発話のさせ方をどんなジャンルにでも当てはめられるかという疑問が湧いた。確かに、英語で話していると、相手はあいづちを打たずにじっと黙って聞いており、相手が話している時は、こちらがいつ話に割り込んだらいいかわからず、不安になることもある。それでも、メタコミュニケーションの視点で相互行為や言語使用を分析する研究者として、言語 (文化) 間の違いがあるにせよ、会話のジャンル間で、どの立場の人が、また、どの内容に対して行う

かに応じて、重複発話の出方が異なるのではないかと推測するに至った。会話には様々なジャンルがある以上、状況に応じて英語話者がどのような重複発話を行い、それが日本語話者のものとどのように異なっているかを比較分析で観察し、その結果から学んでいく必要があると考えた。

しかしながら、言語使用を扱う語用論、社会言語学、会話分析などでの重複発話の先行研究は、単一言語内の分析でも異言語 (異文化) 間比較でも、参与者の社会的関係 (上下、親疎) や情報量に焦点をあてたものが多かった。そのため、同じ参与者による複数ジャンルの相互行為については、言語 (文化) 間での比較が行われていなかった。これは、いかに重複発話が社会的実践として相互行為の構築に貢献できるかを考察する上で重要な視点であった。

## 2. 研究の目的

本研究は、日英語の異ジャンル間比較から重複発話と協調性の関係を分析し、場に応じた会話の進め方に関する英語教育に役立たせることを目的とした。具体的には、親しい女子学生同士、ならびに、初対面の女子学生と女性教員による自由対話と課題達成談話という異ジャンル間での重複発話に焦点をあて、頻度・種類、及び、参与者や内容に応じた機能を分析することにより、ジャンルや言語で、重複発話を用いて参与者間で協調性を産み出す方法が異なることを示した。

特に、補助期間内に以下3点を明らかにした。

- (1) 重複発話の頻度・種類 (あいづちを伴わない重複発話、類似表現による重複発話など)、また、重複発話の機能分布においてどのような違いがあるか。
- (2) 重複発話の機能分布にて、発話を重複させる参与者ごとに、また、重複する内容に応じてどのような違いがあるか。

(3) 上記(1)と(2)の結果は、参与者間の協調性の産出にどのような影響を及ぼしているか。

### 3. 研究の方法

本研究では、平成15-17年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究(B)(課題番号15320054)「アジアの文化・インターアクション・言語の相互関係に関する実証的・理論的研究」(代表:井出祥子)において、異言語(異文化)間対照研究を目的に収録された英語と日本語による談話データ「ミスター・オー・コーパス」に含まれる英語と日本語の自由対話、及び、課題達成談話をデータとして用いた。その際、会話参加者が互いの発話にどのように働きかけて協調性を産み出すかという動的な営みをより多元的に解明していくため、語用論、社会言語学、会話分析などの関連分野の手法や理論を見直し、本研究の目的に適った分析方法を確立していった。

具体的には、親しい女子学生同士のデータと、初対面の女子学生と女性教員のデータについて、会話内容の構築過程で、重複発話の頻度・種類、また、重複発話の機能分布においてどのような違いがあるかについて、主に割合や特質に着目し、英語と日本語を対照させながら明らかにした。そして、その分析結果が参与者間の協調性の産出にどのような影響を及ぼしているか考察した。

さらに、発話を重複させる参与者ごとに、また、重複する内容に応じて、重複発話の機能分布にどのような違いがあるか、その結果が参与者間の協調性の産出にどのような影響を及ぼしているかを、英語と日本語を対照させながら明らかにした。その上で、英語会話と日本語会話における重複発話の特徴とジャンルの違いがもたらす影響の度合いに関する傾向を見出し、それらの特徴に対して、英語話者、日本語話者が話題や人間関係の構築において、集団が備えている文化的信条や慣習

がどのように関わっているかといった、言語使用と社会文化との関係を包括的に解明する議論へと繋げていった。最終的には、場に応じた会話の進め方に関して、日本語話者の特徴をふまえた形で、英語教育に役立つ教材作りへの指針を浮かびあがらせた。

### 4. 研究成果

前項の方法に則った分析の結果、話し手と聞き手の立場を維持しつつ合意に至る英語話者と、同一表現の反復で協調性を生み出しつつ合意を図る日本語話者の傾向を示した。具体的には、自由対話では、相手の話を軌道に乗せて先に進ませたり、沈黙による間を減らすことに貢献したりする重複発話が、課題達成談話では、1つの話題に対して2つの見方を共存させる重複発話が多く見られた。ただし、日本語話者同士では、内容の理解と共有性を確認し合う重複発話が、英語話者同士では、相手の意見を把握して協力的な物語作りを助長する重複発話が多く見られた。

そこで、重複発話が持つ協調性として、自由対話では、現行の話題に乗っかり、沈黙による気まずさを最小化しつつリズムよく会話を展開することで、参与者間の関係をより密なものにして話を円滑に進める、いわば雰囲気重視した性質を、課題達成談話では、同じ課題を行う参与者として互いの見方を提供することで、参与者間の合意形成を促す、いわば内容を重視した性質を持つことを明らかにした。

その上で、異文化間コミュニケーション能力を育む英語教育において、教員は日本人学習者に何を指導するべきかという観点から、「語用規則」(村田, 2015: 279)を援用し、日本人学習者が英語の重複発話を学ぶ上でどの指導法が可能かを考察した。そして、ジャンルに応じた会話への参与や会話の共同構築法という、本研究で明らかになった結果をふまえて、ジャンル間で異なる語用規則をより明示

的に指導へ組み込む必要性と、異文化コミュニケーション能力向上のために、暗示的指導と明示的指導を並行して導入する必要性を、教材作成への一助として提言した。

以上の研究成果をより一層充実したものとすべく、特に、2017年度は、3つの学会や研究会において、国際的に研究成果を発信したり、発信のきっかけとなる講演を企画したりして、議論を深める場を増やした。1つ目は、15th International Pragmatics Conference(国際語用論学会)で、川崎医療福祉大学の小崎順子氏と共に、アジア圏の英語教育に携わる研究者をパネリストに企画されたThe interfaces between pragmatics and language education(企画者: Cynthia Lee氏 [the University of Hong Kong] とAngela Chan氏 [City University of Hong Kong])に参加し、"Pragmatic rules as an enhancement of students' intercultural competence: A study based on a functional analysis of overlaps in task-based dialogues"を発表した。そして、日本人英語学習者に語用論の面で何を指導すべきかを問題提起することで、アジア圏の英語教育において、異言語(異文化)間コミュニケーション能力を向上させるために、教育者としていかに貢献しうることに関する議論を深めることができた。

2つ目は、JACET談話行動研究会にて、上越教育大学のIvan Brown氏に、"Researching and teaching intercultural communicative competence through conversation-analytic approaches"という題目でご講演をお願いした。このお話を通じて、会話分析研究の立場から、異言語(異文化)間コミュニケーションがどのようなもので、それが実際の第二言語教育にどのように生かされていくべきかに関連する重要な知見を得ることができた。

3つ目は、JACET 56th International Convention(大学英語教育学会国際大会)において、Contribution to English language teaching from a pragmatic approach: A discussion on

English as a foreign language (EFL) textbook materials and teaching methods for conversation and writingというシンポジウムを企画し、異言語(異文化)間コミュニケーション研究の現状と問題点を念頭に、語用論の面で何を指導することができるのかについて、聖心女子大学の奥切恵氏が英作文の研究から、京都産業大学のBen McDonough氏と当該科研費の研究代表者が会話の研究から発表を行った。その後、フロアを交えて、日本人英語学習者に対する会話と英作文の指導における共通点と相違点をふまえながら、グローバル化していく社会の中で、日本人英語学習者の英語による発信能力を高めるために何をすべきかについて、白熱した議論をコーディネートし、多くの研究課題を掘り出すことができた。

#### 【参考文献】

- Bateson, Gregory. (1972). A theory of play and fantasy. In Bateson, G. (Ed.), Steps to an ecology of mind: Collected essays in anthropology, psychiatry, evolution and epistemology, pp.177-193. New Jersey: Jason Aronson.
- 村田 泰美. (2015). 語用指標とその英語教育への応用. 津田早苗・村田泰美・大谷麻美・岩田祐子・重光由加・大塚容子 『日・英語談話スタイルの対照研究 英語コミュニケーション教育への応用』 pp. 277-291. 東京: ひつじ書房.
- Sacks, Harvey, Schegloff, Emanuel, & Jefferson, Gail. (1974). A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50 (4): 696-735.
- Tanaka, Hiroko. (1999). *Turn-taking in Japanese Conversation*. Amsterdam: John Benjamins.
- Uchida, Lala. (2008). Metacommunicative approach to overlaps in English and Japanese: Their purpose and distribution. 『東京電機大学総合文化研究』 6: 63-70.

Uchida, Lala. (2005). Do the interlocutors really misproject the previous speaker's TCUs?: The case of English conversation. 『東京電機大学総合文化研究』 3: 89-94.

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6 件)

Kosaki, Junko & Takeda, Lala. (2018). Pragmatic rules to enhance students' intercultural competence: a study based on a functional analysis of overlaps in task-based dialogues. *JACET Chugoku-Shikoku Chapter Research Bulletin*, 15: 37-54. 査読有り

竹田らら (2017). どの場面で、誰が、何を、何のために「繰り返す」のか 二種類のジャンルにおける「反復」の機能とそれがもたらす協調性 . 『日本語学』 36(4): 70-80. (依頼執筆) 査読無し

竹田らら (2016). 重複発話から創出される協調性 親疎が異なった日本語相互行為の異ジャンル間比較からの一考察 . 『社会言語科学』 19(1): 87-102. (DOI: [https://doi.org/10.19024/jajls.19.1\\_87](https://doi.org/10.19024/jajls.19.1_87)) 査読有り

竹田らら (2016). 繰り返し同時発話はなぜ生じるのか メタコミュニケーションからの日本語異ジャンル間比較 . 『社会言語科学学会第37回大会発表論文集』 20-23. 査読無し

竹田らら (2016). 重複発話の日英語比較: ジャンル・心的距離・言語の違いは協調性の産出にどう関わるか. 『日本英語学会研究発表論文集 (JELS)』33: 149-155. 査読無し

竹田らら (2015). 日本人大学生同士の会話にみる重複発話: 異ジャンル間比較を

通した機能分析と協調性. 『日本語用論学会第17回大会発表論文集』 10: 81-88. 査読無し

[学会発表](計 13 件)

Takeda, Lala. (2017). How to devise EFL teaching methods from L1 interaction data: A cross-genre analysis of topic management through overlaps. *Matsuyama JALT October Meeting* (於: 愛媛大学城北キャンパス) 招待講演.

Takeda, Lala. (2017). A cross-genre analysis of topic management through overlaps in student-student interactions: Its application to English language education. *JACET 56th International Convention* (於: 青山学院大学) シンポジウム.

Kosaki, Junko & Takeda, Lala. (2017). Pragmatic rules as an enhancement of students' intercultural competence: A study based on a functional analysis of overlaps in task-based dialogues. *15th International Pragmatics Conference (IPrA)* (於: Waterfront Centre, Northern Ireland) パネル.

Takeda, Lala. (2017). Diachronic change in politeness through overlaps: A case study of Japanese asymmetrical interactions. *15th International Pragmatics Conference (IPrA)* (於: Waterfront Centre, Northern Ireland) パネル.

竹田らら (2017). 日本人教員と学生の初対面相互行為における重複発話 - 「不均衡を解消させること」に対するジャンルの影響を考慮して-. 第10回 日本語実用言語学国際会議 (於: 国立国語研究所)

Takeda, Lala. (2016). A cross-genre analysis of functions of overlaps in English and Japanese student interactions: Focusing

on the overlapper in a metacommunicative approach. *JACET 55th International*

*Convention* (於：北星学園大学)

竹田らら (2016). 重複発話を通じた距離感の調整 親疎とジャンルが異なる相互行為の分析から . ミスター・オー・コーパス研究 & 中国語データ分析ワークショップ (於：日本女子大学)

竹田らら (2016). 繰り返し同時発話はなぜ生じるのか メタコミュニケーションからの日本語異ジャンル間比較 . 社会言語科学会第 37 回研究大会 (於：日本大学)

竹田らら (2016). 話し言葉から「重なり」を分析する：理論とデータから見えてくるもの. 第 12 回話しことばの言語学ワークショップ (於：東京外国語大学) シンポジウム講師 (指名)

竹田らら (2015). 重複発話の日英語比較：ジャンル・心的距離・言語の違いは協調性の産出にどう関わるか. 日本英語学会第 33 回大会 (於：関西外国語大学) 懇話発表.

竹田らら (2015). 重複発話と協調性に関する日英語異ジャンル間比較 初対面の大学教員と大学生の会話を分析して . 大学英語教育学会第 54 回国際大会 (於：鹿児島大学)

Takeda, Lala. (2015). Collaboration through overlaps in English and Japanese: A cross-genre study of interactions between university students. *14th International Pragmatics Conference (IPrA)* (於：

University of Antwerp, Belgium) パネル.

竹田らら (2015). 日本人初対面二者間会話における重複発話 異ジャンル間比較を通じた協調性の一考察 . 日本コミュニケーション学会第 45 回年次大会 (於：南山大学)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

竹田らら (TAKEDA, Lala)  
東京電機大学・工学部・講師  
研究者番号：80740109

### (2) 研究分担者

該当者なし

### (3) 連携研究者

該当者なし

### (4) 研究協力者

該当者なし